

龍角寺出土壇仏の位置付け

肥田 路美

早稲田大学文学学術院

2015年の龍角寺の発掘で、壇仏が一点出土した（図1）（城倉ほか2017）。蓮華座を踏む立像の脚部片だが、底面と両側面が平滑であり、像の右側に天衣が垂下する図様が確認できる点から、独尊の菩薩立像壇仏とわかる。この龍角寺出土壇仏の図様・技法・製作年代・用途について考察し、その位置づけを試みる。

壇仏とは、凹形の范で粘土を型取りして成形した半肉彫りの仏像をいう。古代インド以来各地で製作され、既存の壇仏をもとにした「踏返し」も行われた。范と粘土があれば特別な技術も要らず、簡便に同形の仏像を複製することができ、図像の改変も容易である点が、壇仏の特徴である。新しい仏像の様式や図像を攝取習得し、地方へ拡散するに当たって、壇仏は格好の媒体だった。

用途は、念持仏・護符・参拝の記念品・寺院への奉納など信者たちの信仰活動のほか、仏塔や厨子の壁面に貼り並べて莊嚴したり、仏塔内に法頌舍利として籠めることもあった。仏像を多数作って功德を積むことを目的に、日課として製作した場合もあったようだ（肥田2011）。

日本では白鳳～8世紀前半頃が壇仏の盛期



©早稲田大学

図1 龍角寺出土の壇仏

だったとみられ、畿内を中心に全国約150カ所（森本2013）で出土しているが、関東・東北ではごく限られる。また、約360点以上出土した奈良県山田寺では、図像や状態の特徴から壁面莊嚴に使用したと推測できる一方、龍角寺をはじめ大多数の遺跡では一個体しか見つかっておらず、明らかに用途が異なる（清水1995）。

龍角寺出土壇仏は、残高5cm、幅7.5cm、最大厚2cm。菩薩像は裙を正面で打合せて短めに着け、衣端を細かく波打たせる。蓮肉の縁の雄蕊を僅かな段差で表すなど、図様は精細である。当時は像の周囲と裏面に白土による下地が施されていたとみられ、像と蓮華座には金箔を貼っていた点が確認された。尊像を引き立てる手法や、一点のみの出土である点から、厨子などに奉安して礼拝像としたものと考えられる。



図2 結城廃寺出土の観音菩薩立像壇仏

（龍角寺出土壇仏断片：右下と図像が一致）

本破片の全体の図像を復元するのに最も重要な資料が、結城廃寺から出土（[結城市教育委員会 1999](#)）した観音菩薩立像壇仏である。足首以下を欠いているが、右前に合わせた裙の衣端が両脚間や左脚の外側で作る波状の襞は、龍角寺壇仏と全く一致し、左脛の衣文の位置や形状も両者ほぼ同じと見てよい。龍角寺壇仏では左脚がわずかに遊脚のように見えるが、果たして結城廃寺像は明瞭に腰を右に捻って左膝を軽く曲げた三曲の体勢をとる。同じ下総国に所在した両寺の壇仏が同原型資料である可能性は、非常に高いのではないか（[図2](#)）。ただし、結城廃寺壇仏は、薄手で図像部分だけに粘土を詰めたようであり、箱范による龍角寺像の方が本格的な作りである点から、龍角寺壇仏が先行し、結城廃寺は范を再利用した可能性があろう。

製作年代については、この観音立像を、甲午年（694）銘をもつ基準作例である夏見廃寺等出土大型多尊壇仏の中の観音立像と比較すると（完存例が無いため、同原型の押出仏である法隆寺献納宝物の阿弥陀五尊像による）、体躯の捻りや肉付きの表現が格段に進んでおり、こうした体勢や裙裾の表現が薬師寺金堂日光・月光菩薩像に類似する点から、8世紀前半に下ると考えて良かろう。

前述の通り、龍角寺出土壇仏は両側面と底面が平滑で、独尊像の范で作られた点は明らかである。観音菩薩は単独で信仰の対象とされるので、独尊の観音像は飛鳥時代から数多く製作された。しかし、同原型資料と見られる結城廃寺出土観音菩薩壇仏は、これと左右対称の体勢の勢至菩薩壇仏と一対を成し、法量の釣り合う説法印の阿弥陀如来坐像壇仏も複数体出土している点から、個々に製作した壇仏を組み合わせて阿弥陀三尊像を構成したと考えられる（[図3](#)）。

パーツに分けて作った壇仏を組み合わせる手法は、大阪府枚方市の百済寺址出土の大型多尊壇仏でも確認できる（[中東 2015](#)）。結城廃寺では、法隆寺所蔵の銅板鋳出如来三尊像と同原型資料（[結城市教育委員会 1999](#)）でありながら、中尊と脇侍を別々に作った壇仏が見つかっており、これも組み合わせて用いられたものだろう。



図3 結城廃寺出土壇仏の阿弥陀三尊像

結城廃寺出土壇仏における上述の状況は、より本格的な作りである龍角寺壇仏の段階で既に、個別の独尊壇仏がセットになって三尊を構成する方式が成立していた可能性を示唆する。

こうした図像はどこで成立したのか。結城阿弥陀三尊像の中尊を例にとれば、頭部を螺髪とする点、第一指と第三指を捻する点、偏袒右肩の大衣の内に偏衫をつけ腹部に紐帶の結び目を見せる点、両足裏とも衣で覆う点は、いずれも7・8世紀の仏像に例があるものの、壇仏としては稀有な図像的特徴で、確かな手本がなくては作り得ない。これら地方で出土する壇仏の原型は、8世紀前半の中央で作られ、范がこの地に齋されたという推測が、最も妥当だろう。

引用文献

- 清水昭博 1995「出土状況からみた壇仏用法の検討」『考古学論叢』19 pp. 84-107
 城倉正祥・降幡順子・ナワビ矢麻・福岡佑斗 2017「下総龍角寺（II期3次調査）出土の壇仏」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』62 pp. 469-483
 中東洋行 2015「河内百済寺跡出土壇仏雑考」『特別史跡百済寺跡』枚方市教育委員会 pp. 441-464
 肥田路美 2011『初唐仏教美術の研究』中央公論美術出版 pp. 78-84
 森本貴文 2013「日本の壇仏集成」『東アジア瓦研究』3 pp. 63-76
 結城市教育委員会 1999『茨城県結城市 結城廃寺』

図出典

図2・3（[結城市教育委員会 1999](#)）PL48・図2